



百人一首

会員 鈴木 伸治 (64 期)

最近見た番組

昨年の12月から今年の1月にかけて、Eテレ（NHK教育）で、「恋する百人一首」という番組が全8回で放送されており、先に番組に気がついた妻に誘われて見てみた。

百首の中でも約半数近くを占める恋の歌を題材にして、歌の世界を現代に置き換えたミニドラマが流され、国文学の先生が分かりやすく歌の解説をしつつ、人気タレントの久保佳代子さんと壇蜜さんが恋愛にまつわる本音女子トークを繰り広げるという内容であった。現代の恋愛にも共通するような古人の思いを読み解き、参考にするというのがテーマで、女性をターゲットにした番組であったが、私も、あらためて百人一首を新鮮な見方で楽しむことができた。

百人一首との出会い

私が初めて百人一首に触れたのは、小学1年生であった。担任の先生が、お正月明けにかかる大会を開催するのに先だって、百首全てをひらがなで記載したプリントを配ってくださった。冬休みであったか、父（ちなみに、父も弁護士で当会の会員である）が読み聞かせをしてくれ、できるだけ覚えようとしたが、意味が分からなかったこともあって、せいぜい十数首を覚えてくらいであったかと記憶している。もっとも、このとき覚えたものは今でもそらでいえる。

その後、中学や高校で古典として百人一首を学んだ際には、掛詞などの様々な技法を駆使して、様々な風景や思いを古人がよみ込んだということが理解できた。幼い頃には音として覚えてに過ぎなかったが、「五七五七七」のわずか31文字の中に込められた背景の広がり

修習時代

私の実務修習地は滋賀県の大津であった。大津には、百人一首冒頭の歌をよんだ天智天皇を祀る近江神宮があるが、そのゆかりで、同神社は、名人位・クイン

位決定戦等の競技かるた大会が開催され、百人一首の聖地ともいうべき場所である。また、大津での一人暮らし先の近くには、「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」（10番目の歌）とよまれた逢坂の関（山城国と近江国の境にあった関所）の旧跡があった。この歌をよんだ蟬丸はこの近くに庵をむすんでいたと言われ、同人を祀った神社があったこともあり、足を運んでみた。

その他、大津からは、古都奈良や京都にアクセスしやすく、休日にはよく観光に出かけた。行く先々では、吉野、天橋立のように歌によまれた地や、歌人に関する名所旧跡が多くあり、百人一首の世界をより身近に感じることができた。なお、京都の嵯峨嵐山には、百人一首をテーマにした「時雨殿」という博物館があり、ゲームなど最新の装置を通じて世界を楽しむことができるオススの施設である。

さいごに

弁護士になった現在、数十頁、ときに100頁を超えるような書面を作成することがあるが、当然、長く書けば裁判に勝てるというわけではない。ポイントを押さえ、構成や表現を工夫して裁判所を説得しなければならない。古人は、31文字という制約の中で、構成を練り、言葉を選び、技法を駆使して現代にも受け継がれるような歌を生み出したが、そこからは、法律書面を作成する上でのヒントが得られるかもしれない。

さて、この記事を書くに当たって、私には約1300字という十分なスペースが与えられたが、思いを伝えられたであろうか。紙幅も尽きたので、次号の「読み人」にバトンタッチすることとしたい。

